

| | |
|---------------------|--|
| <p>タイトル</p> | <p>2022年度 学校推薦型選抜</p> <p>共同教育学部 教育人間科学系 教育心理専攻 小論文問題</p> |
| <p>評価の ポイント</p> | <p>問題に特有な点として、調査結果の表の見方と、日本の生徒の特徴を踏まえて考察する総合的な思考力を評価した。評価にあたっては、次の2点を重視した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 調査結果から、以下の事実が読み取られているか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本の読解力の平均は、OECD平均を上回っている。 ・ 日本の週あたりの学習時間は、OECD平均を下回っている。 ・ 読解力と週あたりの学習時間には、顕著な相関がみられない。 ・ 週あたりの学習時間が平均以上の国々では読解力得点のばらつきが比較的大きく、週あたりの学習時間が平均以下の国々では、読解力得点のばらつきが比較的小さい。 2. 調査結果を踏まえた上で、日本の読解力が平均を上回り、また週あたりの学習時間が平均を下回る理由について、考えを述べることができているか。 <p>それ以外のこの問題にのみ限定されない全体的な評価として、以下の点も評価している。</p> 3. 原稿用紙の使い方、誤字脱字、文のねじれなど表現形式面で問題がないか。 <p>解答例</p> <p>まず OECD 加盟国・地域全体を概括した傾向として、週あたりの学習時間と読解力テストとの間に、あまり相関がないということが言える。学習時間が短くとも読解力の成績が高い国もあれば、その逆の国もある。これは両者の関係が単に比例、反比例の関係にあるのではなく、それ以外の要因が両者の間にあることを示唆している。たとえばそれは、いたずらに時間をかける学びをする生徒と、逆に学習方略を効率的に活用している生徒との違いが各国間にはあるようである。</p> <p>グラフの左上のグループにおいては、短時間で効率よく学んでおり、だからこそ読解力が高いという良循環の関係があることが示唆される。その一方、グラフの右下のグループは、学習時間は長いものの、それほど読解力の成績は上がっていない。ある意味で読解力の成績が低いゆえに長時間の学びが必要になっているのかもしれない。</p> <p>以上のような読解力テストと学習時間という二つの変数だけでは、上記のことは推測することにとどまる。たとえば左上のグループの名称が明示され、その国の歴史的経緯などに基づく、社会文化的環境が明らかになることで、これらの左上のグループの各国の社会文化的環境が豊かであり、先進国・成熟国であるということが確認されるだろう。逆に右下グループは、そうした社会文化的環境が比較的乏しいということが確認される。</p> <p>日本は左上グループに大まかには属し、これは先進国・成熟国であるということが言える。OECD 平均の中では、読解力テストは平均的であり、学習時間はやや低い部類に入る。相対的には効率よい学びをしている生徒が多く、まさに成熟国に入るのだろう。</p> <p>その一方で、右上のグループは、長時間学び、読解力テストが高いという新興</p> |

国・成長国であることが推測される。 (733文字)